

映像を用いた授業における大学生の後期ナチズムのイメージ形成 —テキストマイニングの手法による分析—

國原 幸一朗*

1. はじめに—問題の所在と研究目的—

第二次世界大戦が終わって70年を迎え、戦争を体験していない世代が、戦争の加害者・被害者としての側面をどう理解し、後世に伝えていくのかが問われている。ラインハルト(2009)は、「ナチズムの時代の記憶は、今後のドイツ民主主義が安定するための土台になる」という¹⁾。また、川喜田(2004)は「加害者対被害者」という二項対立を軸に、加害者の戦争責任を学ぶことは、移民が増加するドイツにおいて「ドイツ人対外国人」という図式を必要以上に先鋭化させてしまうおそれがあるため、二項対立を弱め、両者の相互理解と共生を強調すべきであると指摘する²⁾。小野寺(2012)も、ナチズムとホロコーストの研究から、同意・協力と抑圧・強制の双方を切り離さずに被害と加害の重層性を解明していくことが課題であると捉え、ナチズムを支えていた「ナショナリズムに内在する包摂と排除の構造」、「コロニアルなメンタリティ」、「伝統的なユダヤ人憎悪」に目を向けるべきであると述べている³⁾。

第二次世界大戦時のヒトラーの主要な思想として、優者必勝の原理、ユダヤ人排斥、ドイツ民族生存圏の確保と拡張、反共産主義論があり、後期ナチズムでは、それらに東方大帝国の建設、政党政治と議会の排除、一党独裁制の樹立が加わった(村瀬(1990))⁴⁾。この時期のドイツの戦争責任について考える際、独裁者ヒトラーと彼を中心とするナチスを絶対悪とする見方が支配的であるが、ベルサイユ体制以降の膨張政策や支配勢力の中に異常性が存在していたことは看過できない。斉藤(1979)も、村瀬と同様、「ヒトラーは救世主に祭り上げられた」と述べ、「ヨーロッパの征服と世界帝国の建設という夢への衝動がベルサイユ体制に拘束されたドイツ国民の感情を捉えた」と評している⁵⁾。

また、ヒトラーは独断的に政策を遂行したのではなく、ドイツ支配勢力の多様な要求を調整して、各集団相互の対立を解決することに注力し、個々の支配集団から独立して諸集団の対立を調整して、統括的な立場から重要な政策を決定していたという見方もある(村瀬(2007))⁶⁾。ヒトラーやナチズムをドイツ史の中でどう位置づけるかは難しい問題であるが、被害者と加害者の両側面を考慮しながら、政治的・経済的側面

を踏まえ、国民との関係を総合的に見ていくことが求められていると言えよう。このことは歴史学だけでなく、歴史教育においても同様である。

大学における歴史教育に着目すると、芳賀(1982)は人間の多面性やその認識の多様性にふれる必要があると述べ、史料に基づく調査の重要性を強調しているが⁷⁾、現状は、一般教養科目として受講する学生に対しては、歴史に対する興味や関心を喚起し、専門分野の内容へどうつなげるかが重視されている。画像や映像を用いて解説することも多いが、学生の歴史認識の深化をどう評価するかが問われなければならない。

歴史認識の発達と変容の分析・考察については、藤井(1985)が中学生と高校生を対象とし、それらを明らかにするための方法論について述べている⁸⁾。ここでは、歴史意識を心理的側面、歴史的思考力、歴史的考察力、歴史的問題意識に大別して捉え、質問紙法や感想文を用いて分析している。また、分析する際の問題点として、回答者の表現能力や調査者の解釈の独断性を挙げている。本稿では、調査者の解釈の独断性を改善するための一つの試みとしてテキストマイニングの手法を用いる。

以上より、本研究では、映像を用いた授業において、大学生の後期ナチズム、とくにヒトラーのイメージがどう変化したかを、コメントシートに書かれた内容をもとに、テキストマイニングの手法を用いて明らかにすることを研究目的とし、2014年に筆者が麗澤大学経済学部で行った世界史の授業を手がかりとする。

また、予め断っておきたいが、すでに述べた國原(2013)の内容と、以下の点で異なる⁹⁾。まず、授業時に学生がコメントシートに記した内容と映像の内容を関連付けていること、次に、ヒトラーの扱いが異なる2つの映像の印象を比較していること、さらに、学生の歴史意識の変化を明らかにするためテキストマイニングの手法を用い、分析結果を可視化したことである。

2. 分析の対象と方法

(1) 授業における映像の役割

映像を通して世界史を学ぶ意味については、家長(2003)が①自らの視野を広げる、②自分自身の考え方や生き方を振り返る、③世界史への興味・関心を喚起する、④様々な視点から歴史を考察できると述べ、

*筑波大学大学院人間総合科学研究科

映像を用いる際の留意点として、⑤作品の位置づけ、⑥授業のねらいに必要なところを見せることを挙げている¹⁰⁾。映像を導入教材から内容教材へ転換させるには、④～⑥に重点を置く必要があるが、現状は①～③に時間を割いていることが多い。國原(2013)は、映画鑑賞後、授業の中で学習者が史実に立ち返る場を設け、映画の提起する問題について史実をふまえて学習者が思い起こし、振り返るような工夫が必要であると述べた¹¹⁾。これについては、映像視聴のポイントを示したワークシートが有効である。映画は、監督等が原作を意図的に再構成して上映している場合が多いが、なるべく史実に基づいたものを見せ、多様な解釈を示す必要がある。

本学会誌で、塚本(1996)が紹介した高等学校の世界史の授業では、「白バラの祈り」を教材化し¹²⁾、民衆運動を行った人々の存在・想い・行動について学ぶことを通して、平和を貫く勇気と主体性を養う授業計画(2時間)を示している。「白バラの祈り」を通して、「若者がなぜ立ち上がったのか」、「抵抗運動が挫折した原因とファシズム体制の特色」、「白バラの今日的意義」を考えさせようとしている。授業で用いた資料と生徒の意識・理解についての詳細は読み取りにくいですが、ファシズムへの関心と理解を深めたことは理解できる。

(2) テキストマイニングを用いた授業研究

学生の体験や感想など非構造的データを分析する場合、データの量が増えると客観的な分析が課題となる。テキストマイニングは、質的データの中でも文章型、テキスト型のデータを分析する方法で、自動的に言葉を抽出し、様々な統計手法を用いて探索的な分析を行う。それによってパターンやルール、知識や概念の発見を行う。KH Coderは、社会学の分野での利用が想定された内容分析やテキストマイニング用のソフトウェアであるが、言語研究(佐野・李(2007)¹³⁾)や看護(井村・平澤・林・中森・田口・中谷(2013)¹⁴⁾)、教育(小川・田中・掛川・森広(2011)¹⁵⁾、越中・目久田(2014)¹⁶⁾、橋弥・梶村(2014)¹⁷⁾)等の幅広い分野で利用されている。なかでも、小川・田中・掛川・森広(2011)は、児童の書いた文章の中から特徴的な表現をテキストマイニングにより抽出し、児童の変容を明らかにすることができる^{と述べている}。

しかし、テキストマイニングのソフトウェアは、客観性と時間短縮の面では向上したが、文章の中から単語を切り出し、単語出現数と語と語の関係から分析するため、学生の文章作成能力や論理の構築能力、表現能力により影響を受けることは避けられないとの指摘もある(樋口(2014)¹⁸⁾)。

3. 2つの映画の歴史的検討

(1) ナチズム映画の動向

戦後、ファシズム・ホロコースト・ヒトラーに関して映画化された作品の製作年と製作国をみると(図1)¹⁹⁾、1960・70年代と2000年代で製作数が多い。1960～70年代は冷戦が激化し、ベルリンの壁が構築された時期で、2000年代はドイツが統一され、ベルリンの壁が破壊された後にあたる。1960年代のアメ

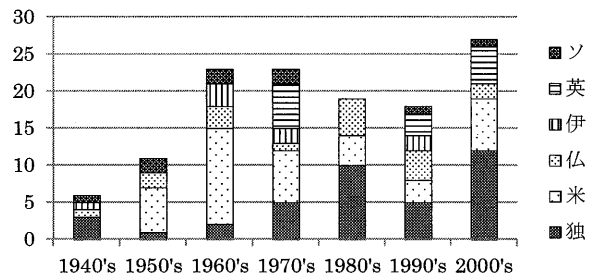


図1 ナチス・ヒトラーに関する映画(単位:本)

複数国による共同製作の場合はそれぞれの国でカウント、飯田(2008)をもとに筆者作成

リカの製作数も多く、1990年代まで減少している。授業では、「白バラの祈り²⁰⁾」と「ヒトラー-最期の12日間-²¹⁾」を視聴させたが、この2つの映画は、いずれもドイツで製作された。

また、ヒトラーのイメージを決定づけたのは、チャールズ・チャップリンの『チャップリンの独裁者』である²²⁾。1945年11月から1946年10月にかけて行われたニュルンベルク国際軍事裁判でヒトラーの行いが広く知られるようになり、1960年代には、ヒトラーの生涯を描きながらナチ時代を検証するドキュメンタリーも製作された。1970年代の『アドルフ・ヒトラー/最期の10日間』(1973年)では、防空壕での最期の日々が描かれ、実際の映像や写真も多用された。アメリカは冷戦で戦意を向上させるため、敗戦国ドイツを悪役に仕立てた映画を制作した。しかし、ベトナム戦争の長期化で反戦運動が高まり、アメリカの正義を見せる映画は少なくなった。

さらに、ナチズムをテーマとした映画として、ホロコースト映画がある。ホロコーストは、ナチスによるユダヤ人大量虐殺を示す語として一般化されているものの、イスラエルのユダヤ人の中では、ヘブライ語の「絶滅」を意味する「ショア」が用いられている。この語が題名になった映画が、フランス人映画監督クロード・ランズマン(1985年公開)によって制作され、現在の映像とユダヤ人やドイツ人、ポーランド人らを被害者・加害者・傍観者として証言させ、虐殺の実態を浮かび上がらせようとした。

(2) 「白バラの祈り」の歴史的意義

インゲ (2009)²³⁾ は1952年の初版『白バラは散らず』で、白バラの抵抗が歴史的に考察されることなく神話として定着し、英雄崇拜を覆すことはできなかったと回顧している。しかし、池邊 (2000) は、インゲがショル兄妹の抵抗運動をできるだけ事実に近づけて描こうとしたと述べ²⁴⁾、ニュルンベルク国際軍事裁判でナチ犯罪への糾弾、ドイツ人への非難が強まるにつれ、「白バラ」は、「良心にもとづく蜂起」、「キリスト教信仰にもとづく抵抗」であることが必要とされ、彼らの活動を客観的に捉えることが困難となったとみている。つまり、「白バラ」の活動の政治色は弱まり、道徳的な側面が強まった。

この「白バラ」の活動家を裁いた民族裁判所は、政権反対者を裁く目的で設立され、被告人の人権は考慮されなかった。ショル兄妹とクルストフが逮捕されたたった4日後に処刑され、彼らに控訴・上告の権利が与えられず、クルストフはビラの草案を書いただけであるが死刑に処せられたことなどをみると、政権反対者の根絶と反ナチの動きに対する威嚇が根底にあったと容易に推察できる。また、民族裁判所で陪席裁判官を務めたハンス・ヨアヒム・レーゼが、1967年にベルリンの陪審裁判所で5年の禁固刑となったが、差し戻し裁判となり、翌年判決は有罪から無罪へと一転した。レーゼの無罪は、ナチ裁判官の役割を肯定し、「白バラ」メンバーの反逆罪判決は妥当であったとみなされたことになる。

1982年に映画「白バラの祈り」が上映されたが、映画監督ミヒャエル・フェアヘーフェンは、白バラの抵抗を崇高な宗教的行為としてだけでなく、現実にも目を向け、正しい理解を求めようとした。しかし、「白バラの祈り」の映画については不可解な点が多い。彼らの精神状態、抵抗運動をどう進めようとしたのか。これについては、物語より前の抵抗運動を知る必要があり、彼らの反逆罪判決の妥当性も問題視されるべきである。池邊 (2000) は、もっと根本的な部分に目を向け、遺族や抵抗関係者の手によってつくりあげられた抵抗史そのものを検討する必要があると述べている²⁵⁾。

また、對馬 (2007) は、ナチ国家に否定された普遍的価値が反ナチ運動においていかにして本来の意味をもちえ、戦後史の中で展開したかについて述べている²⁶⁾。この否定された普遍的価値をキリスト教的ヒューマニズムと捉え、宗教的・倫理的側面から、ハンス・ショルとインゲ・ショル兄妹の「白バラ通信」がヨーロッパ各国に覚醒を求めた (對馬 (1997)²⁷⁾、白バラ通信の内容については、インゲ (2009)²⁸⁾ を参照)。

(3) 「ヒトラー—最期の12日間—」の歴史的意義

21世紀になると、ヒトラーは狂気の独裁者から様々

な側面をもつ人間として描かれるようになった。本映画では、親しみのある上司として描かれている。1942～45年までヒトラーの個人秘書を務めたトラウドゥル・ユンゲ (1920-2002) は、死の間際に長年の沈黙を破って、ヒトラーとの日々を語った²⁹⁾。この映画は、歴史家ヨアヒム・フェストの著作と元総統秘書のトラウデル・ユンゲの回想録「最期の時まで」をもとにしている。ミュンヘンに住む歴史作家メリッサ・ミュラーはユンゲをインタビューし、発表されていない日記を知る。それは彼女が1947年に記憶が薄れないうちにと書きためていた日記であった。日記は校正されず、史実を校正し2002年に出版された。この日記をもとに、ユンゲへのインタビュー映画「死角にて」は、2002年のベルリン映画祭で話題になった。ユンゲは、映画祭の初上映の数時間後、癌のために亡くなった (福田 (2004)³⁰⁾)。

この作品に対して、歴史家は「史実には忠実だが人物描写があいまいである」と批判している。また、英国のメディアは、「ドイツはついにヒトラーについてのタブーを突き崩した」、「ドイツ人がヒトラーを許し、そうすることによって、自分たちの罪の意識からも解放されたい」、「こういった映画はホロコーストの罪を軽減したい歴史解釈修正主義者を手助けする」と批評している³¹⁾。

ヒトラーを人間的に描くことに、ドイツでは反対や懸念があった。ヒトラーを正面から捉えた映画としては、ドイツで初めてである。プロデューサーは、監督・配役をドイツ人に固執し、ヒトラーだけでなく、周囲の人間を含めた人々の描き方にもこだわった。しかし、「この作品だけではヒトラーのことは分からない」、「ナチの組織的犯罪の描写が抜け落ちている」、「歴史的な事実を知らなければ、ヒトラーを同情的に捉えてしまう危険性がある」などの批判も多く見られた³²⁾。ヒトラーのとらえ方が多様になってきたとしても、ナチズムの時代がもたらした傷は容易に癒えず、極めてデリケートな問題であるといえよう。「傍観者に罪はないのか、ドイツ国民の罪の意識」も問われている。齊藤 (2009) は、ヒトラーの人間性の描写と逆に、ユダヤ人虐殺についての評価が厳しいことを指摘し、ナチスを評価する際、あくまでナチスの罪を常に求める立場と、ナチスとヒトラーの歴史描写について、当時のように経験することをめざす新しい動きがあるとみている³³⁾。本稿では、両者の立場をふまえる。

本映画は「白バラ」との接点がある。ユンゲはミュンヘンの街角を歩いていた時、ゾフィ・ショルの記念碑を見つけ、そこに刻印されていた生年月日が自分と同じ年であったことを知り、ショックを受け、生涯何もでき

なかった自分の無力さを恥じ、戦後は目立たないよう質素な生活を送っていたと告白するシーンがある。

4. 授業の展開と歴史認識

筆者の担当する世界史A（一般科目）の授業のシラバスは表1の通りで、映像を多く用い、毎回コメントシートに書かせ、提出させている。受講登録者数が100人を超えるため、グループワークや、書かせた内容を取り上げて深める授業が行えていないが、授業内

容のレジюмеと資料を用いた解説と、映像を用いて特定の場面について考えさせる作業を併用している。

本稿で取り上げる第10・11回の授業では、第1回に世界史に対する質問紙調査を行い、第10回の最初にヒトラーのイメージを書かせ、その結果をふまえて、当時のドイツの政治と経済について解説し、「ヒトラー—最期の12日間—」と「白バラの祈り」を視聴させて、ファシズムとヒトラーに対する理解を深めようとした。

表1 筆者が担当する世界史Aの授業

回	内容	映像等	ワーク・コメントシート内容
1	オリエンテーション	質問紙調査	①高校の世界史の授業（印象に残っていること、時代、国・地域）、②履修学年・科目、③学習した時代区分、④映像の嗜好度とストーリー把握、⑤受講理由、⑥学びたいこと等
2	帝国主義の成立	ヨーロッパのアフリカ侵入（地図）	①帝国主義の成立と世界分割、②地図から何が読み取れるか、③スエズ運河とパナマ運河の比較、④青山土について
3	変法運動	「西太后」、 「NHK：蒼穹の昴」	①中国分割と変法運動、②万寿節、③開戦派と講和派の主張、④皇帝と西太后の関係、⑤日本と朝鮮の関係
4	清朝の改革	「孫文」	①孫文の工場主への要求内容、②支える女性の心情、③孫文の主張
5	辛亥革命／日露戦争		①辛亥革命の経過、②日露戦争の原因・結果・影響、③ロシア革命
6	第一次世界大戦	「映像で綴る20世紀」	①サラエボ事件、②三国同盟と三国協商、③バルカン問題、④ソンムの戦い、⑤アメリカ参戦、⑥終戦後のドイツ
7	ヴェルサイユ体制		①第一次世界大戦後のドイツ・日本・中国の動向、②国際連盟
8	ファシズム	「映像で綴る20世紀」	①世界恐慌、②ニューディール政策、③ブロック経済、④ファシズム
9	第二次世界大戦	「映像で綴る20世紀」	①第二次世界大戦開戦、②軍事同盟、③なぜ日本は真珠湾攻撃を行い開戦したのか、④終戦
10	ナチズム①	「白バラの祈り」	①ナチズムについて、②ヒトラーについて、③ピラの内容、④なぜすぐに処刑されたか、⑤彼らと裁判官の考えの違い
11	ナチズム②	「ヒトラー 最期の12日間」	①ドイツの戦局の変化、②軍と市民の関係、③ヒトラーの自害、④主人公の思い、⑤ユダヤ人迫害
12	冷戦	「映像で綴る20世紀」	①朝鮮戦争の原因と戦局の変化、②スターリン政策の成果と課題
13	ベトナム戦争	「映像で綴る20世紀」	①ベトナム戦争の原因と戦局の変化、②冷戦の様相
14	緊張緩和と多極化	「映像で綴る20世紀」	①キューバ危機、②緊張緩和、③ベルリンの壁、④天安門事件、⑤冷戦終結
15	イスラム世界とアフリカ	「マンデラ氏に関する映像」	①マンデラ氏の活動、②イスラム世界とアメリカ、③授業感想

(1) 大学生の意識

本科目（一般科目）の受講者（経済学部2～4年生が受講、有効回答者数71人）に第1回で質問紙調査を行ったが、世界史の好きな学生は39%、世界史A受講生は41%、世界史B受講生は38%であった（表2）。現代史を学習した学生は44%（世界史Aと

世界史Bで差はない、世界史Aか世界史Bいずれを履修したか不明の者を含む）である。ただ「現代」の時期の認識についてはばらつきがあり、ファシズムはどの時期にあたるかを尋ねたところ、現代と答えた学生は24%であった。次に「映像を見るのは好きか」と尋ねたところ、79%は好きで、字幕付き映画をよく見

表2 履修学生の現代史と映像に対する意識（括弧：人）（2014年4月）

	世界史好き (28)	世界史A履修 (29)	世界史B履修 (27)	現代史学習済 (31)	ファシズム正解 (17)	映像好き (56)	話の理解得意 (23)	字幕付映画 よく見る (39)	吹き替え映画 よく見る (40)
世界史好き		11	14	13	9	26	10	10	17
世界史A履修	11		3	16	10	26	14	18	17
世界史B履修	14	3		15	5	24	7	16	19
現代史学習済	13	16	15		8	25	12	22	23
ファシズム正解	9	10	5	8		16	4	9	10
映像好き	26	26	24	25	16		21	34	37
話の理解得意	10	14	7	12	4	21		16	17
字幕付映画 よく見る	10	18	16	22	9	34	16		26
吹き替え映画 よく見る	17	17	19	23	10	37	17	26	

(有効回答71人)

る学生は55%，吹き替え映画をよく見る学生は56%であったが、「ストーリーを把握するのは得意か」については、「はい」が32%であったため、話の内容が理解できるよう、ワークシートに記入させ、適宜映像を止めて解説を行った。

ナチズムの授業を進める前に、ヒトラーについてのイメージを書かせた（なかには詳しく書いていた学生もいたが、事前に予習してきたと考えられる）が、KH Coderを用いて特徴を見出してみたい。①抽出語を2次元の散布図（対応分析³⁴⁾）に示してみると（図2），抽出語の数は多くないが、ユダヤ人虐殺や独裁

のイメージが強いと言える。また、関係性の強い語をグループ化するため、②「階層的クラスター分析³⁵⁾」を用いて樹形図を作成し、軸の値が点線のところで枝を切ると（図3），「ユダヤ人迫害」「独裁」「元首」「ナチス党首」「オーストリア出身」「演説で国民の心をつかんだ」といった、散布図よりもやや詳細な特色が読み取れる。さらに語と語の関連性を可視化するため、③「共起ネットワーク分析³⁶⁾」を用いると、「ユダヤ人」と「オーストリア」「ドイツ」「政治」を核とする関連性が見出せるが、この結果は①と②の結果と相違なく、経済的側面は見出せなかった（図4）。

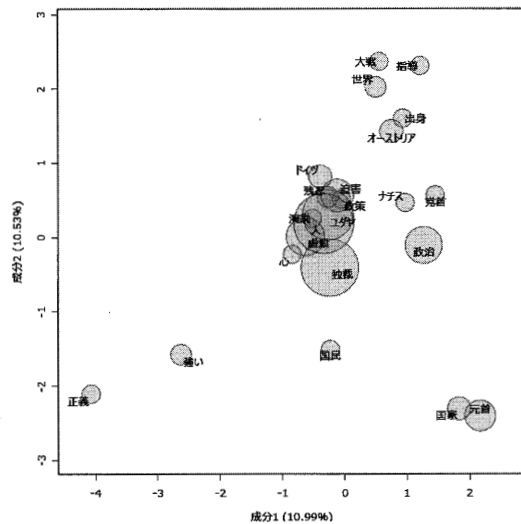


図2 対応分析

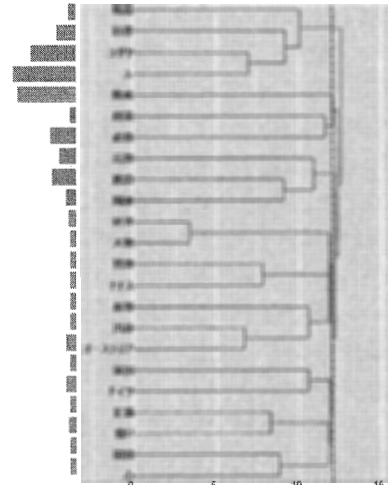


図3 階層的クラスター分析

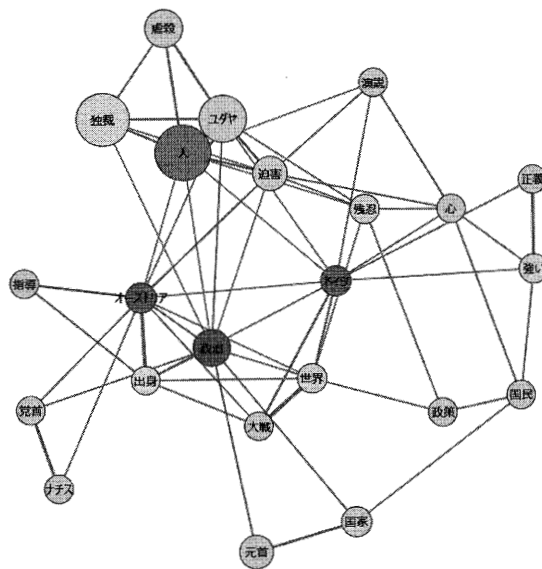


図4 共起ネットワーク分析

(2) 授業の課題

以上をふまえ、授業では、まずファシズム・ナチズム・ヒトラーについて、当時のドイツの国際政治と国内政治、特に経済的側面を強調しながら解説し、その後、2つの映画作品の一部を視聴させた。ストーリーの全体が分かるよう、視聴していない部分は解説や資料で補い、視聴の際も、ワークシートで「どこに注目するか」、「何を考えるか」を強調した。

まず、「白バラの折り」（表3）を視聴したが、この映画では、①主人公らが命がけでまいた「ピラ」に書かれた内容（表4）、なぜこのようなことをしたのか、②取調官モーアと裁判官、主人公らの主張の違い（表5）、③なぜ執行猶予が与えられず、すぐに処刑されたのかについて（表6）、映像を手がかりに考えさせた。①の理由については、「言論と信仰の自由」に気づく学生は15人と少なかった。②の主張の違いについては、映画では主人公らの主張が短いため、その中から読み取らなければならない。授業では裁判官と彼らの主張の違いを考えさせたが、取調官モーアとゾフィの会話の中にも、ナチズムとヒトラーに関する見解の相違と核心を突く部分があった。③の即時処刑については、映像から引き出すとすれば、表6の第2～5位の回答内容が多くなる。

次に「ヒトラー—最期の12日間—」を視聴したが（表7）、この映画では、①プロローグで、なぜ80歳を越えた今ユンゲは告白したのか、当時はヒトラーの政策の誤りに気づけなかったのか、気づけたとしても行動できたか、②軍人と市民の関係、③ヒトラーの自殺、④エピローグでユンゲの証言の意味について読み取らせようとした。①については、ユンゲの態度と行動を批判する意見もあったが、何もできないのではないかと考える学生もいた。②については、「市民のことはどうでもよい・守れないとしても仕方がない」15人、「何とも思わない・関係ない」13人、「生き延びなければ弱者」9人、「戦争に負けたら国民もない」6人、「何も考えない」5人と、映像から戦時中の厳しい現実を読みとって表記していたが、なかには、映画で勇敢に立ち向かうシェンク教授を取り上げ、「市民を守る必要がある、誰が面倒を見るのか」を取り上げた学生も3人いた。③について、「ヒトラーはなぜあのような自殺方法をとったのか」について尋ねると、「敗戦を悟ったから」14人、「敵の侮辱を受けたくない・さらし者になりたくないから」12人、「存在を消したかった・身元を分からなくするため」9人、「敵におびえながらくらすのはいや・どうしようもない状況に追い込まれたから」5人、「プライド・責任を負って・償い・人を殺し過ぎたから」4人、「戦争を終わらせるため・支持者がいなくなったから」2人、

それ以外に「戦死したかのように見せる・自分のせいで国が負けたようにはしたくなかった・降伏の意志を伏せる・勝つべきがなくなった・孫娘たちに分からなくするため・国を思って・生き延びても結局死ぬから」といった理由が挙げられた。この中で、ヒトラーに償いの気持ちがあったのか、国を思って行った行為なのかは疑問視されるであろう。④のユンゲの証言の意味については、発言を取り上げた意見、ストーリー全体から見た意見、現在と関連づけた意見に分けられる（表8）。

(3) イメージの変化と分析

学生の2つの映画の感想を、KH Coderを用いて分析した。まず「ヒトラー—最期の12日間—」については、抽出語数はヒトラーのイメージについて書いたときと変わらず、「ユダヤ人」「国民」「戦争」「ドイツ」「描く」がよく用いられている（図5）。階層的クラスタ分析では特色がつかみにくいが（図6）、共起ネットワーク分析の結果を見ると（図7）、国民・戦争と他の語とのつながりが強く、映像視聴やワークシート記入の作業を通して、よりヒトラーや国民の立場で考えることができるようになったと評価できる。「白バラの折り」については、「ヒトラー—最期の12日間—」と比較すると「思う」がよく用いられているが（図8）、語彙数が少なく（図9）、階層的クラスタ分析の下位の枝（図9）と共起ネットワークの太線部分をみると（図10）、映像のプロローグとエピローグの部分の影響を受けていることが読み取れる。次に2つの映画を見て、ヒトラーのイメージがどう変わったかを「よくなった」「変わらない」「悪くなった」「分からない」で選択させたところ、ヒトラーの人間性を強調した映画でヒトラーに対する印象がよくなった学生が5人（いずれも男性）、むしろ悪くなった学生が5人（いずれも女性）で、多くの学生は変わらないか判断できないと述べた（表9）。この理由として、ヒトラーの人種差別政策、とくにユダヤ人虐殺に対するイメージが強いためであると考えられる。

本科目の講義最終日に映像を用いた授業について感想を書かせたが、「理解しやすい」、「印象に残る」、「覚えやすい」を挙げた学生が多かったが（表10）、これを共起ネットワークで示すと、「目で見て記憶に残る」「様々な人の感情や様子がよく分かる」「楽しく覚えられる」「頭に入りやすい」「伝わりやすく理解しやすい」「歴史を深く学べる」などが読み取れる（図11）。

学生の書いた文を忠実に読み取る内容分析の方法もあるが、全体的特色を短時間で把握する上で、本ソフトウェアによる分析は授業のフィードバックに示唆を与えてくれる。

表3 「白バラの祈り-ゾフィ・ショル最期の日々-」の視聴部分と留意点

時間	展開と特徴的な台詞	気づかせたい点
開始	(プロローグ) この映画は90年代に新たに出た証言と資料にもとづいてつくられている。ピラ「スターリングラードでドイツ軍は死傷者多数」「ヒトラー大統領のお粗末な作戦で33万人のドイツ兵が大死した」などと書いたピラを印刷し、封印して投函する。残りのピラは大学にばらまくことを決め、翌日作戦を執行する。	ピラの内容？ なぜこのようなことを計画したのか。
8分	1943年2月18日作戦執行。ピラをまいた後、最後に欄干に置いたピラを落とす。ピラまきがすぐに見つかり、2人は護送され、取り調べを受ける。ゾフィはモーアが取り調べる。「内容は特別戦時法に抵触するが、反逆罪は禁固刑か死刑になる」ゾフィらは自白しなかった。ピラにはかかわっていないと判断され、調書が取られた。	なぜ政府批判が重罪になるのか。
30分	取り調べ後、独房に入った。その後、ゾフィは釈放されることとなり、受付で書類に記入していた時、電話が鳴り、再び取調べを受けることとなった。部屋から大量の切手が見つかり、何を郵送するために使うのかと訊問される。モーアは、「ヒトラーは戦争を引き延ばすだけだ」「犯罪組織ナチは決して勝利できない」「言論の自由と信仰の自由を」とピラを読み上げた。「この中傷ピラは、君のアパートのタイプで打たれている」、「しかもアウグスブルクとミュンヘンで大量に投函されている」、「部屋に兄の友人の手紙があった、その友人も兄と同じ医学生」と訊問する。クラコフにいる友人のアトリエの謄写版から兄の指紋が見つかった。兄は自白し、すべて自分一人で行ったと述べた。調書への兄のサインをみて、妹ゾフィも自白した。供述書にサインする。	なぜ釈放されなかったのか。 ピラの内容を確認する。
44分	独房内で。「今に彼らも目覚める」「2か月もすれば連合軍が来てドイツは解放される」	
51分	2月19日の取り調べ。「我々白バラは黙さず邪悪な人間を告発する」とあるが、我々とは誰か。抵抗運動という言葉も使っており、複数の犯行ではないか。関係者について尋問される。「両親がどんな目に合うか考える」「私を反逆罪で告訴しておいて、自分だけ助かるために仲間を裏切れというの、兄の友人は無関係」。	
64分	2月20日の取り調べ。 モーア：「法がなければ秩序はない」「法の他に何に頼れというのか」「良心なんてバカらしい」「みんなが勝手に善悪の判断をしたらどうなるか」「犯罪者が総統を倒したら何が残るか、犯罪的カオスだ」「君らは学生の特権を乱用している、戦時下で勉強できるのは政府のおかげだ」「ベルサイユ条約が生んだインフレと失業と貧困をヒトラーが解決してくれた」「財閥や共産主義者から欧州を解放する、ドイツが二度と占領されないための戦いだ」「君らは恵まれている、何が不満だ」「なぜ反対の声を上げるのだ、総統に守られているのに」「ユダヤ人は災いをもたらした」「価値のない命」「神は存在しない」 ゾフィ：「あなたのいう法は、ナチ政権誕生前の言論の自由を守る法よ。今は自由に発言すると投獄か死刑だわ」「良心」「法が変わっても心は普遍よ」「ヒトラーが消えれば秩序を取り戻せる、独裁から解放される」「ドイツを悲惨な戦争に導いて国民は大死よ」「戦争が終われば連合軍が進駐し、ヒトラーを許したドイツ人を非難する」「ナチの恐ろしい大殺戮に目を閉じるの、ドイツは永遠に恥さらしよ」「命は尊い」	モーアとゾフィの主張を整理する。
84分	モーアは、ゾフィに手伝っただけなら調書にそう書いてもいいと言ったが、彼女は情けはいらないと拒んだ。モーアは「よく考えて行動すればよかった、君がこんなことに命を賭ける必要はなかった」と言った。ゾフィは「最善のことをした。後悔していません。結果を受け入れます」と言った。取り調べは終了した。2月21日朝、モーアとともに検事のもとへ。起訴状を見せられ、明日ミュンヘンの人民法廷で裁判を行うことが告げられる。「反逆罪、軍の士気喪失の企て、敵対幫助」。	
84分	2月22日午前10時裁判所へ移送。人民法廷開廷。被告人はゾフィ、ハンス、クリストフ。クリストフ(兄の友人)に対する裁判官の発言「被告は第三帝国から学費の援助を受けている、国家のおかげで学生の身分で家庭も持っている」「反逆罪に弁明はならない」「刑を逃れるために精神異常を装うつもりか」「お前は父親に値しない人間だ」ハンス(兄)に対する裁判官の発言「国家社会主義政府のおかげで4年も学んだわけだ、帝国の費用だ、お前は寄生虫だ」「学生の義務は共同体のために働くことだ」「被告はドイツ国家の援助を受けながら1942年の初夏に「白バラ」のピラ4回分を発行、ピラの中でドイツ敗北を予告し、軍需工場での業務放棄とレジスタンスを呼びかけた。さらにドイツ国民に政府とナチの方針に抵抗するように煽動した。卑劣なことに妹まで巻き込んだ」「ドイツには戦意と忍耐がある。お前らは敵を幫助してドイツ兵の犠牲を増やすだけだ」「ドイツ国民の望みは全面戦争だ。国民は血を流して平和を願っている」「法廷で総統を侮辱するのか」「お前は愚かで哀れな裏切り者だ」。ゾフィに対する裁判官の発言「この紙が理想か、ドイツ人学生に値しないバカの作文だ」「お前こそ下等人間だ」「国民の財産を盗んだわけだ、ドイツは紙不足なのに」「反逆者は平気で盗む」「全面戦争がドイツに勝利をもたらす、武力の嵐でドイツは浄化され偉大になる」。	裁判官と彼らの主張の違いを整理する。
100分	被告の最終弁論前に、父親と母親が入廷。すぐに出される。「正義は死ななぞ」と父親がいつて出る。人民法廷の判決は3人とも死刑。2時30分に刑務所(独房)に移送される。お別れの手紙をすぐ書くよう指示される。両親が面会に来る。父は「お前は正しい、誇りに思う」という。ゾフィは母に「勇気を与えてくれたね、天国で会いましょう」という。面会后、外にモーアがいる。何ともいえない表情。刑場へ向かう直前に、看守の計らいで3人を対面させ、たばこを吸うことを認める。お互い「死は無駄でない」といひ、抱き合う。午後5時死刑執行(最悪の場合でも処刑まで99日あるはずが彼らには与えられなかった)	なぜ彼らに執行猶予が与えられず、すぐ処刑されたのか。
114分	(エピローグ) 白バラのメンバーは厳罰に処せられた。モルトケのおかげで白バラ6号ピラは北欧から英国へ渡る。1943年連合軍機がドイツ上空から数十万枚のピラを投下した(「ミュンヘンの学生達の声明」)。	1943年の英独はどのような状況か。

表4 ビラの内容

順位	人数	内容	書いた項目数	人数
1	41	ヒトラー批判	4つ以上	6
2	29	兵の死傷者, 無駄な犠牲者	3つ	17
3	26	戦争の引き延ばし	2つ	27
4	19	敗戦する, 終戦する	1つ	15
5	15	言論と信仰の自由	なし	6

(有効回答 67 人, 重複回答あり)

表5 裁判官とシオル兄妹らの考えの相違

裁判官		シオル兄妹ら	
考え	人数	考え	人数
・国民は勝戦を望んでいる	11	・戦争を終わらせるべき	19
・戦争に勝つ, 世の中がよくなる	11	・平和を望む	13
・戦争を続ける	9	・戦争は負ける	9
・ヒトラーの政治・法は正しい	9	・自由を求める	4
・戦争は平和をもたらす	4	・良心を求める	4
・戦争に勝ち栄光が保たれる	3	・戦争は無駄である	3
・ヒトラーの支配により平和	3	・虐殺を止める	3
・ヒトラーがドイツを救う	2	・戦争に負け世界から見放される	3
		・平和で平等な社会をつくる	2
戦争に勝ち軍国主義を強める/戦意と忍耐がある/戦争は国のため/軍事力があって平和になる/神は存在しない/政府とナチの方針が正しい/ユダヤ人を撲滅する/虐殺の事実はない/自分たち以外は生きる価値はない/ナチスとヒトラーはドイツに必要/ヒトラーのおかげで勉強できる	以下 1	ヒトラーは国を滅ぼす/降伏してヒトラーを辞めさせる/神を信じる神が裁く/ヒトラーのせいで多くのドイツ人が死んだ/ナチの政権を終わりにする/ドイツ人のあるべき姿を訴えたい/生命の尊重	以下 1

(有効回答 59 人, 重複回答あり)

表6 シオル兄妹らがすぐに処刑された理由

順位	人数	内容
1	34	ヒトラー・ナチス・国家への批判を行ったから
2	12	裁判官の怒りを買ったから
3	12	国民に悪影響, 反乱を扇動すると考えたから (「無言の声の支持を感じ危険だと思ったから」を含む)
4	8	罪を認めず 反省の色がなく, 反抗したから
5	6	国民と軍の士気を低下させたから

(有効回答 67 人, 重複回答あり)

表7 「ヒトラー—最期の12日間—」の視聴部分と留意点

時間	展開と特徴的な台詞	気づかせたい点
開始	(プロローグ) 主人公ユングの独白「今なら私も若くて愚かだった当時の私に腹が立ちます。恐ろしい怪物の正体には気づけませんでした。ただ夢中で何も考えず、秘書の依頼を受け取りました。熱烈なナチではなかったし、断ることもできたはずです。私は総統本部へ参りませんと。でも好奇心に突き動かされ、愚かにも飛び込みました。思いもよらぬ運命が待っているとも知らずに。とはいえ、今も自分を許せずにいます。	ユングが80歳を越えて告白した。なぜ告白したのか。当時気付けなかったか。
2分	総統本部(狼の巣)にて秘書の面接(東プロイセン・ラステンブルク、1942年11月)	
	面接に来た女性に、ヒトラーは「わざわざすまない、こんな真夜中に」を声をかける。犬を可愛がっている。ミュンヘン出身の主人公ユング(22才)は、ヒトラーの口述をタイプライタで筆記していくが間違ってしまう。しかし面接に合格し、秘書に採用される。	ヒトラーの一面
6分	1945年4月20日、ヒトラー56歳の誕生日。ソ連軍の砲撃が激化。敵軍が12kmまで迫っているのに報告しないことにヒトラーは激怒する。特殊作戦(ベルリンが前線となる)の指令で全省庁と軍部署の撤収が始めるが、シェンク教授は「軍が撤退すれば、食料供給がマヒし、だれが市民や兵の面倒をみるのか」と抗議、国防軍の軍医として責任を負うと主張する。また、側近のヒムラーは、ヒトラーに郊外への避難と連合国と外交交渉を行うことを進言するが、受け入れられなかった。彼は、自分が総統の継承者として首都陥落・総統死後、連合国と交渉する役目を果たす意思を示す。逆にヒトラーは強気で、爆撃を受けた方が勝利後、再建が早期に行えるという。古代のアクロポリスや大聖堂がそびえたつ中世都市のような都市をつくるのが自分の夢だという。避難を側近に進められるが否定し、側近のシュペーアに「主役は常に舞台に」といわれる。	軍人と市民の関係 側近ヒムラー・シュペーア・ゲッペルズの考えの相違
20分	首都防衛の指揮官モーнкеは、市民を避難させるべきだといったが、ヒトラーは「市民など構っている暇はない、戦時に市民(女子供、老人、負傷者)は存在しない」と返した。また、鉄道や運河、港などを破壊し、廃墟のような状態にすることを命じたが、シュペーアは、それでは国民は生き残れないという。しかし、「戦争に負けたら国民が何になるという。生き延びられねば弱者で仕方ない」といった。	
39分	ヒトラーは、「自分の命令は届かない、こんな状態で指揮は執れない、この戦争は負けだ」、「自分はベルリンを去るくらいなら頭を打ちぬく」という。「幕を引く潮時だ」、「2度と前の対戦と同じ屈辱は味わいたくない」という側近に分かれた。	
50分	モーнкеはゲッペルズに対し、「装備の乏しい市民が戦っても犬死だ」というが、ゲッペルズは「同情など感じず、彼らが選んだ運命だ、強要はしていない、自業自得だ」と返す。	
69分	ヒトラーはシュペーアに「ドイツと世界のための壮大な構想があった」「誰も理解してくれない」「つくづく悔やまれる」「もう遅い」「公然とユダヤ人に立ち向かったことが誇りだ」「ユダヤの毒からドイツの地を浄化した」「わが国民が試練に負けても私は涙など流ささん」「それに値しない」「彼らが選んだ運命だ、自業自得だろう」と漏らす。	
76分	ヒトラーは側近・秘書と夕食をし、「弱さには死あるのみ」「同情は最大の罪だ」「弱者を排除してこそ勝利がある」と話している途中、ヒムラー単独降伏の知らせが入る。	
85分	戦況は悪化し、部下よりベルリンはあと2日しか持たない、2万人若い将校が防衛線で死亡しているため、脱出の用意をしてほしいと言われるが、脱出しても安心できないと拒む。ソ連に対抗するのは不可能であるが、ヒトラーを含め皆が降伏を受け入れたくないとと思っている。ヒトラーはユングに「政治的遺言書」をタイプライタで速記させる。	
96分	その後、ヒトラーとエヴァ・ブラウンとの結婚が成立した。ソ連軍が数百mまで迫り、もう20時間ぐらいいしか持たなくなってきたときに、ヒトラーは全将校に対し、降伏を禁じ、最後まで戦えと命じた。また、部下のギュンシュにさらし者になるのは嫌だから生死を問わず自分を敵に渡すなどと言った。遺体は跡形もなく燃やせと指示した。彼はすぐにガソリン200リットルを手配した。ゲッペルズの子どもたちは歌を歌い、将校たちは酒を飲んで気を紛らしている。部下はヒトラーの愛犬に毒を飲ませた。秘書たちと別れの後、ヒトラー夫妻は官邸地下要塞で自殺した。空爆の際間に遺体を穴に入れ、ガソリンをまいて焼かれた。ゲッペルズ妻は子どもたちに睡眠薬と毒薬を飲ませた。ユングらは銃をもって要塞を出た。	ヒトラーの自殺
128分	戦闘中止命令(ソ連軍最高司令部との合意)、ゲッペルズ夫妻自殺(遺体焼く)。 モーнкеはシェンク教授を連れて、ユングらと合流。一行はソ連兵に囲まれる。「投降は名誉が許さない」「弾が尽きるまで戦い最後は自決を」「名誉のために自分から助かる道を閉ざすのか」「SSは総統と団体だ」といって外交官や将校らが自殺。ユングは子どもとともに、ソ連兵のいる中を通り過ぎることに成功する。	
	1945年5月7日ドイツ降伏。第二次大戦の死者は5000万人を超える。600万人のユダヤ人が収容所で殺害された。	
144分	(エピローグ)(本人の証言)自分と結び付けられず、自分に非はないと思っていた。私は何も知らないと考えていた。そんなある日、ゾフィ・ショルの犠牲者の銘版を見たとき、私と同じ年に生まれ、私が総統秘書になった年に処刑されたことを知った。その時に、知らなかったことは言い訳にならない、目を見開いていれば気づけたと感じた。	本人の証言の意味

表8 「ユンゲ本人が登場し振り返る場面」を見て考えたこと (括弧：人)

発言を取り上げた(7)	ストーリー全体から考えた(13)	現在への関連づけ(7)
若いから気付かなかったというのは言い訳だったという言葉が印象に残った/無知は言い訳でなく罪である/ヒトラーが正しいと考え、自分では考えず、独裁者にすべてを任せてしまった/自分自身は非がないと思ひ数々の悲惨な現実から目をつぶっていたが、そのことについて秘書も同じことをしたと思った/彼女が見ていればこうはならなかった/*理解していても何もできなかった	*ある程度の独裁必要/ヒトラーが間違っていることに気づけばよかった/戦争中は正しいと思っていたことが後から考えるとそうでないと気づいても遅い/立場によって人生が変わる/戦争否定が大切/市民は誰でも殺される可能性があった/反対意見を聞くことができればヒトラーの人生は変わっていた/ヒトラーを信じた人とそうでない人の考えが違う/戦争や虐殺を正義としていた/戦争は関わった人を不幸にする/戦争は早く終わらせるべきだった/立場や年齢を言い訳にしてはならない/自分に非があると認めるのは難しい/全員が幸せになることはできなかった/*しっかりと見定める、処刑されたとしても	現在につながる重要なものがある/どうすれば平和になるのか/悲惨な経験があるから今がある/自分に負けないことが大切/戦争は早く終わらせるべきだった/*年齢に関係なく正しい方に貫くべき/犠牲を教訓として次の時代に生かす

(有効回答 57 人, 重複回答あり)

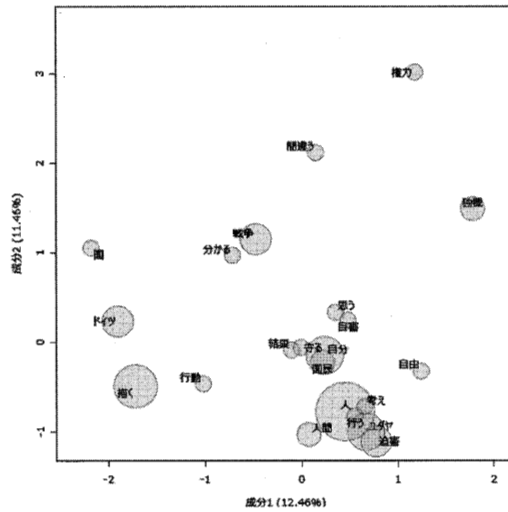


図5 ヒトラー映画感想 (対応分析)

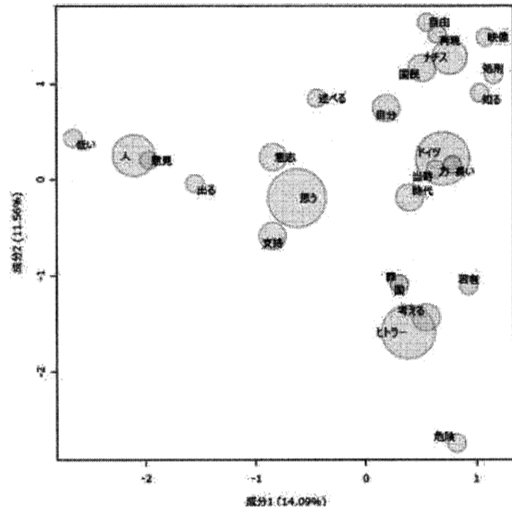


図8 白バラ感想 (対応分析)

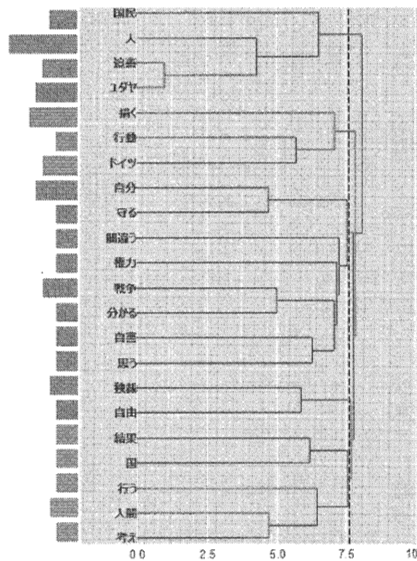


図6 ヒトラー映画 (階層的クラスター分析)

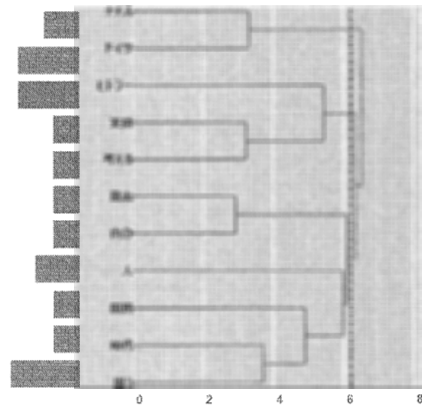


図9 白バラ映画感想 (階層的クラスター分析)

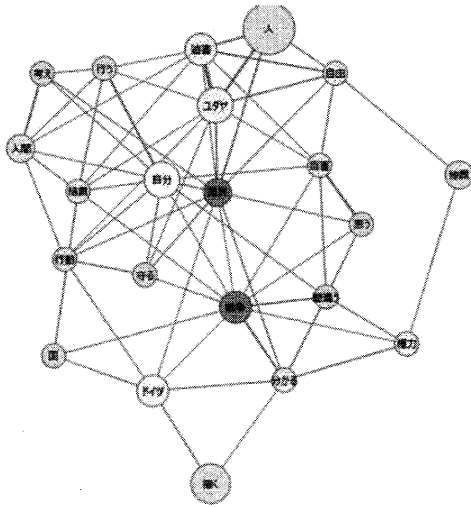


図7 ヒトラー映画感想（共起ネットワーク）

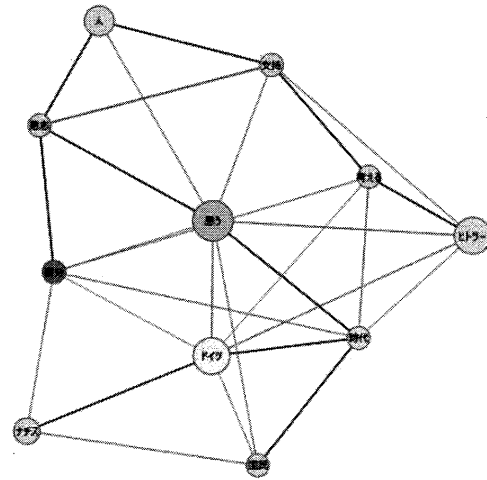


図10 白バラ映画感想（共起ネットワーク）

表9 映像視聴後のヒトラーのイメージの変化

評価	人数	意見
よくなった	5	人間味と優しさをもつ（男），国民のために行動していた（男）
		近親者たちによく思われていた（男），良心があった（男）
		国を大切に思う・優しい面がある（男）
変わらず	26	
評価不明	12	
未記入	23	
悪くなった	5	偉大ではない（女），命を軽く見ている・もっと国民のことを考えていると思った（女），暗黒で独裁者すぎる（女），弱々しい（女），思っていたよりひどかった（女）

（有効回答 71 人）

表10 映像を用いた授業に対する感想

内容	人数
・理解しやすい（表情や気持ち，性格や背景，行動まで伝わる，当時を詳しく知れる，イメージがわかりやすい）	24
・印象に残る。	7
・覚えやすい，深く学べる	5
・歴史を間近に見ることができる	4
・楽しい，鮮明，戦争のむごさや悲惨さ，緊張感が伝わる	3
・興味を抱きやすい	2
感動がある/話の重みが理解できる/主観的・フィクションで、事実を客観的にまとめた書物がよい/違った観点が見える/自分の考えが浮かびやすい	以下 1

（有効回答 60 名，複数回答あり）

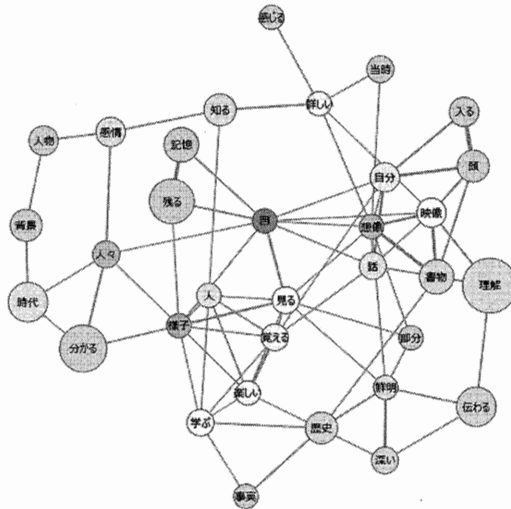


図 11 映像についての意見

5. 結び

本論では、映像を通して、大学生の後期ナチズムのイメージがどう変化したかを、特にヒトラーを中心として、テキストマイニングの手法 (KH Coder) を用いて分析した。学生の意識の分析においては、学生の書いた文章等から読み取っていく方法が一般的ではあるが、学生の用いた言葉がどうつながられているかをもとに、歴史意識を計量的手法により可視化することは、後の授業展開の参考となる。本稿では、授業開始前の意識調査の結果をふまえて、当時のドイツの政治と経済について概説し、次にヒトラーに対する捉え方の異なる2つの映画を視聴して、ヒトラー像ひいては後期ナチズムのイメージがどう変わったかを、テキスト分析の手法を用いて明らかにした。テキスト分析の手法は、学生の意識を広く捉え、学生の書いた文章をもとに授業にフィードバックさせるためのツールとし

て利用できる。

しかし、この研究で見えてきた課題もいくつかある。学生の書いた文章を手がかりに歴史意識や歴史認識を分析すると、先行研究の指摘にもあるように、学生の作文能力と、よく考えて論理的に書かれているかの検討が必要となる。また、このテキスト分析は、語と語のつながりが軸となる分析であるが、語と語の関係が正確に捉えられているかについての適切な解釈が求められる。さらに、テキストマイニングの手法を用いて、質的データの客観的分析をめざしているが、階層的クラスター分析や共起ネットワークからの解釈・考察はかなり主観的となる。加えて、本稿では映像の字幕と画像に着目したが、視覚的な視点だけでなく、聴覚的な視点の分析が十分でなかった。音声を含めた映像教材の分析について、今後の課題としたい。

註

- 1) ラインハルト・リュールupp, 西山暁義訳「ナチズムの長い影－1945年以降のドイツにおける過去をめぐる政治と記憶の文化－」『ヨーロッパ研究』, 8号, 2009年。本稿では「ナチズム」をナチスの主義や政策とみなす。
- 2) 川喜田敦子「ドイツにおける現代史教育－ナチの過去に関する歴史教育の変遷と展望－」『ヨーロッパ研究』, 4号, 2004年。
- 3) 小野寺拓也「ナチズム研究の現在－経験史の視点から－」『ゲシヒテ』, 5号, 2012年。
- 4) 村瀬興雄『ナチズム－ドイツ保守主義の一系譜－』中公新書, 1990年。
- 5) 斉藤孝『歴史と歴史学』UP選書, 1979年。
- 6) 村瀬興雄『アドルフ・ヒトラー「独裁者」出現の歴史的背景』中公新書, 2007年。

- 7) 芳賀登「大学における歴史教育」加藤章・佐藤照雄・波多野和夫編『講座・歴史教育2 歴史教育の方法と実践』弘文堂, 1982年。
- 8) 藤井千之助『歴史意識の理論的・実証的研究－主として発達と変容に関して－』風間書房, 1985年。
- 9) 國原幸一朗「映像を用いた世界史の授業からみた大学生の歴史認識の形成－導入教材から内容教材への転換を求めて－」『麗澤大学紀要』第97巻, 2013年。
- 10) 家長知史『新・映画でまなぶ世界史①』地歴社, 2003年。
- 11) 前注9) 書。
- 12) 塚本徹「歴史教育における戦争学習と民衆の抵抗の取り扱い－ドイツ・「白バラ」抵抗運動の教材化を手がかりに－」『筑波社会科学研究』, 15号, 1996年。

- 13) 佐野香織・李在鍋「KH Coder で何ができるかー日本語習得・日本語教育研究利用への示唆ー」『言語文化と日本語教育』, 33号, 2007年。
- 14) 井村弥生・平澤久一・林朱美・中森美季・田口豊恵・中谷茂子「看護学生の一次救命処置演習の実施による認識の変化ー配置投影とテキストマイニングによる演習前後比較ー」『関西医療大学紀要』, 7号, 2013年。
- 15) 小川修史・田中昌史・掛川淳一・森広浩一郎「児童の変容把握を目的とした小規模校におけるテキストマイニングの有用性に関する検討」『教育情報研究』, 2011年第3号。
- 16) 越中康治・目久田純一「懲戒と体罰の区別に関する学生の認識ーテキストマイニングによる分析からー」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要』, 21号, 2014年。
- 17) 橋弥あかね・梶村郁子「養護教諭養成課程における臨床実習の感想文の分析」『大阪教育大学紀要Ⅲ』, 2014年第2号。
- 18) 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版, 2014年。
- 19) 飯田道子『ナチスと映画ーヒトラーとナチスはどう描かれてきたかー』中公新書, 2008年。
- 20) Marc Rothemund, Sophie Scholl, Die letzten Tage, Berlin, 2004.
- 21) Oliver Hirschbiegel, Der Untergang, Berlin, 2004.
- 22) 前注19) 書。
- 23) インゲ・ショル, 内垣啓一訳『白バラは死なず』未来社, 2009年。Inge Scholl, Die Weiße Rose, Frankfurt/M., S.77, 1955.
- 24) 池邊範子「ドイツ連邦共和国における「白バラ」評価をめぐってー「白バラ」論争の現在の地平ー」『史論』, 53号, 2000年。
- 25) 前注24) 書。
- 26) 對馬達雄「ドイツ現代史にみる<普遍的価値の再生>」『教育學研究』, 2007年4号。
- 27) 對馬達雄「反ナチ抵抗運動とキリスト教的教育の復権」『教育史学会紀要』, 40号, 1997年。
- 28) 前注23) 書。
- 29) ヨアヒム・フェスト, 鈴木直訳『ヒトラー最期の12日間』岩波書店, 2005年。
- 30) 福田直子「賛否両論を呼ぶドイツで話題のヒトラー映画」『世界週報』, 2004年11月23日号。
- 31) 前注30) 書。
- 32) 前注30) 書。
- 33) 齊藤公輔「『ヒトラーー最期の12日間ー』の観察ー集合的記憶論の視点からー」『独逸文学』, 53号, 2009年。
- 34) 抽出語の最小出現数を3以上とし, 出現回数の多い語を大きな円で描画した。
- 35) 文書×抽出語のクロス集計を行い, 主成分分析を用いて求めた各変数の主成分負荷量にもとづき, 最近隣法と Euclid を用いて作成した。
- 36) 出現パターンの似通った語を線で結んで示したもので, 強い共起関係を太い線で, 出現数の多い語を大きな円で描画した。